

シラカバ 家具や楽器に

活用法模索 ブランド木材目指す



シラカバ材のダイニングテーブルを前に、ダケカンバ製のマンドリンを手にする秋津さん（旭川市で）

道内に多く自生するシラカバやダケカンバの新たな活用法を模索する動きが活発化している。木質は堅く、肌触りが良いことから建材や楽器などが試作され、今月下旬には家具の販売が本格的に始まる。新たなブランド木材となるか、期待される。

道によると、シラカバやダケカンバなどのカンバ類は広葉樹の一種で、道内の森林資源量の11%を占め

る。現在は製紙用チップや割り箸などの消費材として使われることがほとんどだ。

道立総合研究機構林産試験場（旭川市）は10年ほど前から、カンバ類の新たな活用法を研究している。

これまでシラカバで部屋のフローリングや壁材などを試作した。秋津裕志研究主幹は「強度的にも既存の建材と遜色ない」と話す。

また、京都市との共同研

究で、楽器の材料に使われるメイプルと似た音響特性があることも判明。ボディにシラカバ、ネックにダケカンバを使ったエレキギターを製作し、楽器職人の協力を得てダケカンバ製のマンドリンも作った。

秋津さんや旭川家具の工房、北海道大教授らは昨年、シラカバの利用促進を目指す「白樺プロジェクト」を設立。ダイニングテーブルや椅子などを作り、一部に樹皮を使ってシラカバらしさを出した。秋津さんは「シラカバは他の広葉樹に比べて木肌が白く、木目もそれほど特徴的ではない。だからどんな部屋にも合わせられる」とし、プロジェクト

として本格販売に乗り出すことにした。

今後は、伐採から運搬までの調達コストやPR方法などを検討し、カンバ類を始めとする広葉樹資源の可能性を探っていく。秋津さんは「カンバ類の良さを広く知ってもらいたい」と意気込んでいる。